

現代版『舞姫』

△はじめに▽

私は今回、現代版「舞姫」を書くことにした。これにしようと思った理由は、私が一番最初に舞姫を読んだ時に、古文とも現代文とも言い難い文章で、設定も昔すぎるこの文に、とても読みづらいという印象を覚えたので、もつと誰にでも読みやすく、わかりやすいものにしたかったと思っただけである。

誰にでもわかりやすい文章にするためには、まずは場面設定を現代にし、言葉を現代語にする必要があった。そこで、原文での設定を次のように変更した。

△原文▽

△現代版▽

・豊太郎	東大法学部	↓	東大理科一類
	某省に勤める	↓	一流の大手企業
	法を学ぶためにドイツへ	↓	支社拡大の責任者として、研修でアメリカに
・エリス	踊り子	↓	キャバクラに勤めるキャバ嬢

この他にも天方伯という人物を削除し、その立場にかわり相沢の親を登場させるなどという風に変更した。

△本文▽

飛行機に乗り込み、指定された席に座った。今こうして一人窓の外を眺めている。五年前、私の勤めていた会社がアメリカに支社を拡大することになり、その責任者を上司に任された私はアメリカに飛びたった。私の会社は一流の大手企業であったこともあり、雑誌などにもそのことはとり上げられ、社の中でも私は一躍脚光をあびた。今回私は日記絵を書くこととしていたが、日記帳はまだ白紙のままである。これは、ドイツでものを学んでいた間に一種の厭世主義を培ってしまったからであろうか、いやそうではない。これには別の訳があるのである。

今日本に帰ろうとしている私は海外転勤が決まった頃の私と違い、世間や人の心が頼りにならず、自分自身も変わりやすいものなのだということを、知ってしまった。昨日と今日で瞬時に変わってしまうような感覚を、書いたところでいったい誰に見せられるだろうか。これが書けない理由である。いやこれには他の理由もある。

私にはとめどなく思い出され、私を苦しめる過去がある。今この飛行機の中でそれを文章に綴ってみようと思う。

私は幼い頃から厳しい教育を受けていた。父は早くに亡くなったけれど、そのことで道を外れることなく、幼稚園から受験を繰り返して、ついには東大の理科一類に入り、入学した後もいつもトップクラスの功績を残し主席で卒業した。一人っ子の私を女手一つで育ててくれた母はたいそう安心していてと思う。卒業後、私は大手企業に勤め、故郷の母を東京に呼び、共に充実した日々を送った。そんな中、上司に私の仕事ぶりが認められ、今度海外進出するプロジェクトの責任者を任されることになった。まずはその手始めに、アメリカに少しの間研修に行くことになり、五十を過ぎた母親と別れることもさほど悲しいと思わず、家を離れてこのアメリカの地にやってきた。私はぼんやりとした功名心と自分を律することに慣れた学習能力を携えて、あつという間に海外生活に慣れた。日本にはない景色、光景は私の心を瞬時にうばった。しかしそれでも私の胸の中には「たとえどんな場所を訪れても自分に用のない美観には心を動かすまい」という気持ちがあったため、周りの誘惑を避けていた。

二、三ヶ月過ぎすうちに研修もおおた済んで、報告書を書いた。暇があれば、アメリカで経済についての本を読み、一方ではプロジェクトの段取りを進めていた。

こうして三年はあつという間に過ぎただけけれど、時が来るとどうにも隠しきれないのが個人の好みである。私は父の遺言を守り、母の教えに従い、なまけず学問に励んでいた時から企画でひたすら勤務をしていた時まで、ただ受動的で器械的な人間になり、はつきり自覚はなかったけれど、二十五にもなつてもうずいぶん長くこのアメリカの風に当たっていたからなのか、何となく落ちつかなくなり、心の奥に潜んでいた「本当の自分」がだんだん表に現れて、昨日までの自分とは違う自分を責めるような気分になっていった。私は思った。「母は私を生きさせた辞書にしようとし、上司は私を生きさせた仕事ロボットにしようとしたのだろう」と。辞書になるのはまだ耐えられもするが、仕事ロボットになるのは我慢ならない。今までは上司の考えにはむかうことなく丁寧に仕事をしてきた私だったが、この頃から上司の考えを否定し、自分の意見をはっきりと言うようになっていった。一方、アメリカの経済を知った私は人から指示されるような立場ではなく、自分自身で新たな企業を立ちあげてみたいという気になってきた。私を、自分の思いのままに動く仕事ロボットにしてしまおうとしていた上司は、独立の意思を抱き、生意気になった男を喜ぶはずがない。私の当時の地位は危うくなっていた。しかし、私をクビにするにはまだ足りなかったはずだ。でも、常日頃から会社で働いていて私に出世を先取りされてしまった私より年配の人たちが、私を中傷するようになっていった。でも、これも理由がないわけではない。

彼は私が彼らと共に酒を飲んだり麻雀したりしないことを、私の頑固さと禁欲的な生き方のせいだと考え、時にはあざ笑い、時には付き合いが悪いと文句を言い、またねたんだりした。しかし私が今まで学問の道をたどってきたのも、仕事をそつなくこなしてきたのも、勇気を奮ってそれをうまく切り抜けてきたわけではなかった。他のことに心を奪われ、乱されることがなかったのは、自分を取り巻いているいろんなものを捨て去り振り返らない勇気があったわけではなく、ただ自分を取り巻いているものを恐れて、自分で自分の手足を縛っていたに過ぎないのだ。

ある日の夕暮れだった。私がある繁華街を歩いていた時、声を忍んで泣く一人の少女を見かけた。

年は十六、七といったところであろう。髪は薄いブロンドで、着ている服は垢に汚れている風でもなかった。

どうしてこんな所で泣いているのか、思わず私は「どうして泣いているのですか？私のでよければ、何か力になれるかもしれない。」と言葉をかけた。すると彼女は驚きながらも、私の思いを理解し「あなたはいいい人ですね。どうか私を助けてください。母さんは私にあの人の言うことを聞かないと言つてぶつてくるし、父は死にました。しかし家にはお金がないのです。」などと境遇を話し始めた。少しの間話を聞いて私は「とにかく家まで送りましょう。」と言つて彼女の家まで二人で歩いた。家に着き、エリスが「ただいま」と家に入つていった。それに続いて私も家にあがった。エリスの母は半白髪にいかにも今まで苦労してきたといった顔つき、そして服は汚れた老婆であった。部屋に入りエリスと少し話した。エリスはいわゆるキャバクラで仕事をしており、そのオーナーが人の弱みにつけ込んでエリスに無理な要求をしてくるという。その要求には耐え難いものがあったが、そうとう生活に困つていて、その上エリスには学歴もないため、そっちの仕事をするより他なかったのだという。

このことが私の苦悩の原因になろうとは・・・。エリスがこの間のお礼をしに私を訪れたのをきっかけに、交際が始まった。私のことをねたんでいた人たちは、このことを「豊太郎が毎日キャバクラに通いつめ遊びほうけている。」と上司に告げぐちし、私はクビになつてしまった。そして上司に「すぐに日本に帰るなら旅費は支給するが、まだこの地に居続けるなら援助金は出さない。」と言われた。この時同時に二通の手紙を受け取った。それは母からの手紙と、母の死を知らせる手紙であった。

それまで次第に仲を深めて楽しい日々を送ってきたが、私のクビの話を知ると、エリスはこのことをエリスの母に黙っているように言つた。こんな無職になつてしまった男だと知つて、うとましく思うのを恐れたためである。

私のエリスに対する気持ちは次第に深まつて言つた。私の不幸を哀れみ、私と別れるのを悲しんでいるその美しくいじらしい姿は、冷静でいられなかった私の心を貫いて、恍惚状態のままこんな関係になつてしまった。

別れをせまられたときに私を助けたのが、同僚の相沢謙吉だった。彼は親が高い地位に就いている人物であつたため、いわゆるコネというものがはたらいた。相沢は親に頼んで私をアメリカに住む知り合いの小会社に紹介してくれた。給料は多いとは言えなかつたが、エリスとその収入を合わせ、いつしかエリスの家で共に暮らすようになった。

寒さも厳しい冬となった。エリスは二、三日前の夜、彼女の働く店で倒れ、同僚に連れ添つてもらいながら帰つてきた。しかしそれ以降よく体の不調を訴え仕事を休み、嘔吐を繰り返していた。最初にこれがつわりであると気づいたのは母親だった。私は焦つた。

今朝は日曜日なので家にいたが、エリスの元気はなく、私の気も重い。するとエリスの母が手紙を持ってきて私に渡した。相沢からのものだった。それには相沢の親が関連会社の新しい企画に協力

して欲しいから、一度来てほしいと言っているというものだった。今、相沢が丁度アメリカに来ていたので一度食事をしながら話すことになった。

相沢と話しているうちに、私はこれまでの不幸で波乱に満ちた経歴を話した。彼は驚いていたが、私を責めようとはせず、逆に私を中傷していた連中をのしった。そして最後に真面目な顔で彼はこう言った。「この一連のことは君の弱い心からでたのもだから仕方ないが、君みたいな学力や才能の持ち主が、いつまでも一人の女にとらわれて目的もない生活をするべきじゃない。流れにまかせてそうなっただけの恋だろう。別れるべきだ。」簡単に言えばこんな感じである。

私は貧しいながらも楽しい今の生活や、愛するエリスを捨てることはそう簡単にはできるものではなくて私の弱い心では決断のしようもなかったが、友の言葉に従い、関係は断つと約束した。私は大切なものをなくすのがこわくて、友に対していやと言えないのが常だった。

そしてその企画を手伝うために一旦カナダまで飛んだ。そこでおおかた仕事を済ますと、相沢の親は私の仕事ぶりを高く評価し“私のもとで働かないか”と言ってきた。

私は「はい」と答えてしまった。この答えは直ちに決断して言ったわけではない。私は自分が信じて頼みとする気持ちを持った人物に急に何かを問われた時は、十分に考えずに「はい」と言ってしまうことがある。そして言った直後に後悔するのだ。

この日相沢の親から旅費と今回の給料としてそれなりの額を受けとり、アメリカに持ち帰った。自分が相沢の親の元ではたらく間の生活費は足りるだろうと思っていた。私が家に帰ってすぐ、彼女は医者にみてもらった。するとやはり彼女は妊娠していた。エリスが私の旅立ちについてそれほど悩んでいなかったのは、私を深く信用していたからであろう。

別れ際に涙を流されると自分も心配になってしまっているので、エリスの知人の所に送り出して、家を出た。

私はよく働いた。あつという間に上司にも認められた。しかしこの間も、私はエリスを忘れることはなかった。いや彼女が毎日手紙を送ってきたため、忘れることができなかったのだ。最初の手紙は心細さを訴えていたのだが、少し経ってからの手紙にはかなり思いが迫った様子で、私への想いやこれからのこと、お腹の子供のことなどが書かれていて、早く帰ってくるのを待っているというような内容であった。

私はこの手紙を読んで、初めて自分が置かれている立場をはっきりと自覚したのだった。仕事場での私に対する信頼はすでに厚いものとなっている。それなのに私は目の前のことしか見えていなかった。

アメリカに来た当初、私は本当の自分というものを悟ったと思い、機械的人間になるまいと誓ったが、これは足を縛られたまま放された鳥がしばらく羽をうごかしただけで自由になったとうぬぼれていただけだった。

一度家へ帰ることになった。家へ着くとエリスは階段からか駆け降りてきて、叫んで私の首に抱きついた。私の心はこの時まで決まらず、故郷日本を思う気持ちと立身出世を求める心とが、時には愛情を上回りそうだったが、この瞬間、ぐずぐず悩む気持ちは消え去って、私は彼女を抱きしめ彼女は頭を私の肩に乗せて彼女の喜びの涙ははらはらと私の肩に落ちた。

私はエリスにつづいて家に入った。この瞬間、私はその光景に驚かされた。部屋にはベビー服やベビーベッドやおむつなどのベビー用品がしっかりとそろえられていたのである。エリスが「準備万端でしょ？生まれてくる日がとても待ち遠しいの」と言って私を見よけた目は涙でいっぱいだった。

二、三日は家で過ごしたが、ある日の夕方、相沢の親がまだカナダにいらつたというので、訪ねることにした。“日本へ来てくれるね？”といわれ、断ることは当然できなかった。もし今この人にすうらなければ、自分はもう名誉をとり戻すことはできないであろう。私は“はい”と答えた。

このことをエリスに言える訳もなく、足取りが重いまま家路についた。エリスはまだ起きていらしく部屋には明かりがついている。家に着いたとたん、私は過度の疲労によって体調をくずした。意識が戻るまでに数週間かかった。ひどい熱の中、苦しむ私をエリスは熱心に看病してくれた。そこへ相沢が尋ねてきて、彼は私が隠していた一部始終を知り、親には病気だということだけを告げ、うまくとりもつてくれたらしい。

意識が戻った時、私はエリスの変わり果てた姿を見て驚いた。彼女はこの数週間のうちに、ひどく痩せ、血走った目はくぼみ、頬はこけてしまっていた。相沢は彼女を精神的に殺してしまったのだ。

後になってきくと、彼女は相沢からこれまでのいきさつを聞き、私が日本に帰国することを承知したことを知り、発狂したあと、その場に倒れたのだそうだ。目が覚めても、彼女はうつ状態に陥っていたのだ。うつ状態はさらに悪化し、合併症まで引きおこした。母親は何度も病院に入れようとしたが、エリスは泣き叫んで嫌がり、その度にベビー用品抱きしめて、手離そうとしなかったという。

私の病は治ったが、変わり果ててまるで屍となったエリスを抱きながら、私は何度も何度も泣いた。日本へ戻る時、エリスの母親に今後の生活費や子供の養育費のことを話し、とりあえずは頭金だけ置いて残りは後々送ることに決め、エリスを頼み、私はその場を去った。

そして、今に至る。

相沢謙吉のような良友はなかなか得がたいものだ。しかし、私の脳裏には、一点の彼を憎む心が今日この日も残っている。

(終)

私は今回、誰にでもわかりやすく、現代っぽい舞姫を書きたくてこのテーマで書いてきた。書いて私が思ったのは、どこまで変更してオリジナリティを出して、どこまで原文を残し、いかに森鷗外がこの舞姫を通して伝えたかったことを壊さないようにするかという微妙な配分が難しいと思った。登場する豊太郎やエリスの性格や心情が読みとれるような表現は残すべきであると考えつつ、適度にさほど重要でないであろうと思われる部分を省くのは意外に難しかった。

結果として、オリジナルなのが現代語訳したのか中途半端なものになってしまい、表現や内容は原文よりわかりやすくなったのかもしれないが決して読みやすいとは言えないし、所々省いた結果、どこか薄い内容になってしまった気がする。今回は、決められた時間内に現代っぽく設定を直して全部を書ききることにいっぱいいっぱいになってしまったので、もう少し面白みのある表現や工夫ができることよかったかなと反省する。

とにかく、原文よりみんなが話の内容を理解しやすいものになっていたらと思う。

^参考資料v

『舞姫』森鷗外 現代語訳 (by 岩本幸一)